

非実在 ~Airmys~
探偵小説研究会
エアミステリ

拾陸
號



エアミステリ研究会

非実在探偵小説研究会16号 目次

企画

企画1 異世界・特殊設定ミステリ

矛盾事件

ギャルゲー好きに捧げる推理小説

ハッピーエンドの向こう側

神崎蒼夜……………6

麻里邑圭人……………44

紫藤はるか……………75

企画2 ショート・ショート

(タイガー田中／麻里邑圭人／足住公達／佐倉丸春)……………162

特別企画

本格ミステリ・フラッシュバック補完計画

松井和翠 他……………99

その他

〈連載〉富士見ミステリー文庫ガイド 第七回

ないとー……………178

表紙・扉ページ

ウスタアヤ



企画1

異世界・特殊設定

今回のお題競作企画は「異世界・特殊設定」ミステリです。

我々が普段生活している日常とは全く異なる世界設定の中で物語が繰り広げられる「異世界」モノ。もう一つは、特殊なルール制約の中で推理を展開する「特殊設定」モノ。この二つを今回の競作のお題としました。(この二つのお題はどちらか選択式として
います)

この企画には3作品が集まりました。それぞれ、どのような世界観や特殊設定ルールを構築し、工夫されているのかというところもあわせて楽しんでいただければと思います。

矛盾事件

かんざき そうや
神崎蒼夜

室内はとても簡素だった。

衣服が収納できるタンス。身だしなみを整えるために使われていたであろう鏡台。そして寝起きをするためだけに設けられた、何の変哲もない木製のベッド。その三つが、この部屋にある家具のすべてだ。部屋の大きさに不釣り合いともいえるその家具の圧倒的な少なさが、ただでさえ広く閑散としている室内を、さらに広く見せている。

そしてそんな部屋のほぼ真ん中に、その死体は横たわっていた。

「誰の仕業だ」

次期当主としての責務を果たそうとしているのだろうか、その声はかすかに震え、内心の恐怖が露呈しかかっている。

「今一度問おう。誰の仕業だ」

ぼく達は誰一人として声も上げず、その場から動こうとしない。

「お前かクラーク。父上から邪見に扱われていたからな。」

その恨みが積もっていたか？ それともジャックか。家督を継ぐことが出来ない運命への逆恨みか？ ハッ、まさかジュリエットに頼まれたわけじゃあないだろうな」

「よさないか兄さん！」

ドラランさんの言葉に耐えかねたように、クラークさんは叫ぶ。「今は犯人探しをする場合じゃない、悼むべきだ」「そうだよ！ そんなことをしたつて、父さんはもう……」
憐れみを含む二人の声を、「黙れ!!」と大声でかき消すと、くると振り返りぼくらの方を見る。

「なあ、もしかしてあんたがやったのか、ミスターホーソーン」

ぞわり。瞬間、ぼくの首筋の毛が逆立った。その目、そして顔には、紛れもなく狂気としか呼びようのない感情が張り付いていた。

「ドララン君、落ち尽きたまえ」緩やかに、いつも通りに喋ろうとする先生の声にも、いくらか緊張が混じっている。

「私の力では不可能だ。それは助手やコーネリアスにとつても同じこと——いや違うな。ここにいる全員にとつても同じことだろう。それは君にもわかるはずだ」

その言葉に誰しもが閉口し、心の中でこう叫んだに違いない。「じゃあどうして彼が死んだのか!!」と。

対魔術において最高峰の守護を誇り、絶対防衛の異名と名誉を欲しいがままにした、サーガイル・シラフ。

その最硬の盾を貫いた矛——ある意味では最高の名誉を承ったその人物は、いったい誰なのだろうか。

*

ホーソーン先生のとこにその話を持ってこられたのは、まだ残暑の厳しい空気が肌にベタベタとまとわりつく、そんな日のことだった。

「また辺鄙へんびなところに事務所を構えているんだな」

パチン。指を鳴らす音が響いたと同時に煤すすの匂いが鼻をかすめ、依頼人であるコーネリアスさんが啞おえた煙草に火が灯る。ぼくも先生も煙草は吸わないが、ここに訪れる人の九割が喫煙者なため、机には常に灰皿が置かれている。

「なに、こちら一帯は家賃が帝都に比べると半額以下なものでね。私のような世捨て人が店を出すには打って付けの場所なのだよ」

それに交通の便も中々なものだし。という先生のセリフに、コーネリアスさんはフンツと鼻を鳴らして応じる。まあ、帝都からほぼ一本道とはいえ、約半日もかかるしね。

「お前のような人間からそんな謙虚な言葉が聴けるとはな。長生きはしてみるもんだよ」

乾いた笑い声をあげながらそう言うが、先生と同じでそろそろ初老に差し掛かるかというのに、その姿からはまだ老いというのは感じられない。ひとしきり笑った後、さつきと同じように、もう一度指をパチンと鳴らす。すると今度は、左手にワインの瓶が現れた。

「こつちの地方じゃあまりお目にかかれない酸味の強いワインだ。慣れれば美味い」

「それなら慣れていない我々にしてみれば、ただの酸っぱいブドウ水だよ」

そんなことを言いながらも、テキパキとグラスを二つ用意し始める。

「その若者の分はいいのか」

「助手を酔わせてしまったら、この後の仕事に影響がでてしまうからね」

ぼくにも飲ませて自分の分が減ってしまうのがイヤだという本音が見え見えなのだが、ここで口を挟むとあとからグチグチと小言を食らうので、黙っておこう。

「なるほどな。では若者よ、あとでこれをタヌキジジイと一緒に飲むがいい」

言うが早いか、コーネリアスさんはまた指を鳴らすと、今度はぼくの手元にワインが出てきた。

「昔から思っていたのだが、お前のマントの下には軍隊が隠れていたりしないよな」

「軍隊か！ それもいいな！」

呆れが混じっているその問いを、ガハハと豪快に一笑に付す。しかしこの話は、学院で昔からささやかれている噂のひとつでもある。

ギルバート・コーネリアス——帝都が誇る魔術学院の副学長にして、生きた宝物庫とも称される、『収納』魔術のエキスパートだ。

一般的な魔術師が収納できる容量は、おおよそ自分の体積と同じくらい、腕が立つ者でもその二倍が限度とされているが、コーネリアスさんはそれを遥かに上回る容量を持ち合わせており、一時代前に起きた大戦では、前線に延々と物資を供給し続ける鬼人のような存在として敵方に恐れられていたともされる。まさに生きた伝説ともいえる人だ。

そんなぼくからすれば雲の上の存在のような方だが、先生とは昔からの学友であるということで（先生曰く、ただの腐れ縁、手紙のやり取りは定期的に行っていたのだが、こうして事務所を訪れてくれるのは初めてのことである。

そうこうしているうちに、コーネリアスさんは互いのグラスに朱色の液体をなみなみと注ぐ。意外といっちは何だが、その手つきは言動とは裏腹に、とても丁寧なものだった。

「それでは、友人との再会に乾杯」

「これから起こるであろう厄介な出来事に乾杯」

グラスを軽く傾け乾杯の意を示し、注がれたそれを互いに口に含む。

「……ふむ、わるくない」

「天邪鬼なお前の舌に合ったようでは何よりだ。今度はもつと酸味の強いものを持ってこよう」

ようやく空気が馴染みはじめてきたところで、先生が「さて」と話を切り出す。

「コーネリアスよ、お前ほどの奴がわざわざこんなところまで会いにくるとは、さぞイヤな案件を持ってきたんだろうなあ。そう思わんかね助手よ？」

「いやあ、ぼくからは何も……」

よしんばそう思っている、口が裂けてもハイそうですとは応えられない。

「ほら見たまえ、助手もそう思って委縮してしまっただじゃないか」

「ぼくはそんなことを思っていないからね！ コーネリ

アス副学長殿!!」

「わかっとるから安心したまえ。こいつのこういう性格は昔から変わつとらんな」

苦笑するコーネリアスさんに対し、先生はおもしろくなさそうに鼻を鳴らすと、身振りで話の先を促す。

「コホン。ホーソーンよ、サーガイルのことは覚えてるか?」

「勿論だ。あの絶対防御のいけ好かない魔術師を忘れるはずがないだろう。まあ、会ったのはもうだいぶ前になるが」

君は知っているかな。そう問うような視線がこつちに來たので、頷いて肯定を示す。逆にその名前を知らない人の方が珍しいのではないだろうか。

サーガイル・シラフ——対魔術において最上級の名譽を欲しいがままにし、前線を退いた今なお、彼を超える魔術防御術を生み出せる者はいないとまで称される、これまた伝説級の魔術師だ。

「この話は内密にしてほしいのだが」そう前置きをし、コーネリアスさんは姿勢を整え椅子に深く座る。ここに來る依頼人の九割がする行動だ。

「実は、来週末にサーガイルの家で家督襲名の儀が行われる予定になっていてな」

「ほおう」興味深そうに目を細め、真剣に話を聞く姿勢へと移る。「あの家にはたしか三人の息子がいたはずだが」
「そうだ。上からドラン、クラーク、ジャックといつて、まだ若い三人が三人とも別々の魔術で成功を収めている」

「なるほど。家督争いの火種は充分に撒かれているということか」

まあ待て、と先生の言葉を遮り、「そういうわけではないのだよ」とコーネリアスさんは話を続ける。

「家督は長男のドランに継がれることが以前から公言されている。本人や家族からも否定の声が出ていないので、それはほぼ決定事項なのだ」

「じゃあ家督争いが起こるようなことはないということですか……?」

ではなぜそんなことで心配などするのだろうか。そんな心中を読み取ったのか、「表向きはということだろう」と、コーネリアスさんに代わり、先生が語りだす。

**続きは非実在探偵小説研究会16号で
お楽しみください。**

本格ミステリ・フラッシュバック補完計画

【執筆者】きばやーし・占魚亭・ないとー・松井和翠・松川慎・麻里邑圭人（五十音順）

《序》

《本書は、松本清張が『点と線』『眼の壁』を雑誌に連載して注目を浴びた一九五七年から、新本格の発足の年である一九八七年までの、約三十年間に獲得した作家たちを取り上げ、ある程度歴史的価値を有する作品とともに、現代の読者の目から見て再評価・再検討に足ると思われる作品をブックガイド形式で紹介することを目的としている。何故この期間で区切ったかという点、従来、社会派の勃興に始まるこの時代は本格の衰退期と見なされており、本格論ではエア・ポケットになりやすかったからである》

『本格ミステリ・フラッシュバック』序文より

二〇〇八年十二月に東京創元社から刊行された『本格ミステリ・フラッシュバック』（千街晶之・大川正人・戸田和光・葉山響・市川尚吾）は私たちを歓喜させました。

所謂「新本格」以後のミステリに慣れ親しんでいた私たちではあります、が、「新本格」以前にも恐らく多様な本格ミステリの傑

作が書かれたであろうことを漠然と想像しながらも、その範囲の広大さ、書籍量の膨大さを前にして、（大袈裟にいえば）立ち竦むほかありませんでした。少なくとも一九八七年に生を受けた私にとつて、これは偽りのない率直な感想です。ですから、『本格ミステリ・フラッシュバック』は、そんな私たちの渴を癒してくれるオアシスの泉となり、また「昭和」という大海を見渡すための羅針盤にもなってくれたのです。

今回、お送りする『本格ミステリ・フラッシュバック補完計画』はそのオマージュ企画であり、（面映い言い方をするなら）十年越しの感謝状、いや恋文とさえいえるかもしれません。少なくとも、アンチテーゼではありえないことは確言できるでしょう。

松井和翠

『歌舞伎町殺人事件』青柳友子

(「ラブ・マシーン殺人事件」改題)

一九八五年／有楽集文

新宿・歌舞伎町にあるボルノ総合館「ラブ・マシーン」。＼オトコの夢の城＼を
目指したその建物の従業員たちが次々と
不審な死を遂げ、ルポライターの麻沙美
は事件の真相に迫るべくバニーガールと
して潜入取材を開始する。だがそんな麻
沙美にも殺人鬼の魔の手が――。

本作は、あの切り裂きジャックを現代
日本に蘇らせようとした意欲作である。
それにあたり作者はまず、かつての切り
裂きジャックの犠牲者である娼婦たちが
生きた世界を、歌舞伎町という街に現代
風のアレンジを施して作り上げた。それ
が本作に登場するボルノの殿堂「ラブ・
マシーン」だ。
その「ラブ・マシーン」を中心に展開
する物語はオーソドックスな構成ではあ
るものの各登場人物に纏わるドラマが実
に魅力的に描かれており、読者をぐいぐ

いと引き込んでくれる。サスペンス性が
高いのは勿論だが、それに加えて意外な
犯人と恐るべき動機という見所まで用意
されており、本格読者にも楽しめる作品
に仕上がっている。(麻里邑)

『死者の学園祭』赤川次郎

一九七七年／ソ文・角文・岩崎

目の前で、クラスメイトが墜落死を遂
げるといふショッキングな事件のあと、
結城真知子は武蔵野にある私立高校に転
入する。ところが、その矢先、クラスメ
イトの三人の少女が次々と不審な死を遂
げる。真知子は意気込んで事件の真相を
推理しようとするが――。

赤川次郎、初の著作となつた長編第一
作。次々と犯行を重ねていく犯人の様子
を描きつつ、計算された人物配置で犯人
を隠し、常に予断を許さない展開をみせ
る。加えて若い女性をヒロインにし、ロ
マンスも絡めて、巧みに読者の興味を惹

きつける。

ただ、それだけならば、ある種の典型
的なサスペンスの筋をなぞっているだけ
ともいえるのだが、一家に犯罪者と刑事
と弁護士が揃っているという『ひまつぶ
しの殺人』や、『三毛猫ホームズの推理』
の豪快なトリックなどで、大胆な発想に
目を見張らされたように、本書も陳腐と
もいえるある道具立てに大胆なアレンジ
を施し、意外性のある作品に仕上げてい
る。(ないとー)

『死体置場で夕食を』赤川次郎

一九八〇年／徳ノ・徳文

紺野洋一と芳子は新婚旅行中、吹雪の
山道で道に迷いロツジに辿り着いた。主
人夫婦は二人を快く迎え入れ、先客の六
人と親しくなる。しかし翌朝、一階に降
りると誰もおらず、地下のボイラー室に
は主人の死体が。洋一を残し町に助けを
求めに行つた芳子が瀬川刑事とロツジに



非実在探偵小説研究会～Airmys～16号

発行日 2018年11月25日
発行 エアミステリ研究会
連絡先 airmysdj@gmail.com
 <http://www43.atwiki.jp/airmys-dj/>
価格 800円
印刷所 株式会社ポプルス

Special Thanks

編集作業をお手伝いして下さったエアミス研有志メンバー

©2018 エアミステリ研究会 作品の著作権は各著作者に帰属しています